

## 国際金融機構についての一考察：金ブレーキ論批判

岩野，茂道

<https://doi.org/10.15017/4403335>

---

出版情報：経済學研究. 29 (2), pp.75-91, 1963-06-25. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：



# 国際金融機構についての一考察

——金ブレイキ論批判——

岩野茂道

## 目次

- 一、はし が き
- 二、信用伸縮機構
- 三、兌換 (1)
- 四、兌換 (2)
- 五、金制動機 (ブレイキ)

## 一 は し が き

国際的流通においては兌換停止下の今日でもなお完全価値の素材・金を基礎にした貨幣（たとえばアメリカのドル貨）のみが円滑に機能するということは明らかである。そしてこの事實は、貨幣の本質を貨幣素材金の商品性格に求める金属主義理論を正当づける一つの重要な現実的根拠ともなっている。他方、貨幣金をもって貨幣としての貨幣の本質にとっては二次的なものとしている貨幣の名目主義理論にあっては、世界貨幣としての金の現実的機能の漸次的

低下という歴史的趨勢<sup>(註)</sup>を背景に自らの主張の優越をゆずらないのであるが、その場合現実の金の実践的役割の説明に際しては貨幣理論の本質とは別個に慣習的・法的に構築された体制上の物的保証として把握するのが普通である。

(註) 國際通貨制度の發展とともに貨幣金の節約機構が發展せしめられたという意味でなら真実であるが、世界貨幣としての金は依然として國際間の最終的支払手段であり、その限りでは金の役割の減少については簡単な結論は出さるべきではない。

今日、ドル危機をめぐって、IMF (國際通貨基金) 改組案が提出され、果てしない論争が続けられている。これらの諸提案のほとんどの理論的基礎が、貨幣の名目主義理論乃至は貨幣數量説による貨幣管理の思想で支えられていることは事実である。

われわれはIMF設立の理論的基礎を与えたJ・M・ケインズと共に今世期貨幣管理學説上看過できない一人としてシユムペーターの主張をとりあげる。

周知のシユムペーターの信用創造論は、その論理のゆきつくところ、銀行の發券業務は、銀行自身の自由裁量に従わされるとの議論を必然とするものである。「銀行の本質は国營である」(J. A. Schumpeter; Die goldene Bremse an der Kreditmaschine, p. 176. 以下「Bremse」<sup>(註)</sup>と略す)、信用制度と文化段階の高度の發展は流通經濟に横たわる必然性の高い認識によって貨幣の合理的管理の可能な状態を作り出す、との彼のヴィジヨンはその貨幣信用の基礎理論に照応している。このヴィジヨンを直接に指示し、方向づける概念こそ、われわれの問題とする金制動機ないしは金ブレーキ(Gold-Bremse)、あるいは安全制動機装置(Brems vorrichtung)論である。金制動機(ブレーキ)論は貨幣數量説をその理論的基礎にしている。貨幣管理の實踐と理論の背後には必ずといっていい程金制動機(ブレーキ)論が在る。一八四四年の銀行条令の實踐で知られる通貨學派からしてすでに例外でなかった。しかしそのことから、

貨幣數量説↓金制動機論↓貨幣管理という図式を作り、これを金融の理論と実践に現われた技術主義的誤謬として看過してよい理由はない。ピール条例からIMFに至るまでの貨幣管理の歴史は金制動機論の主張者が大きな役割を占めてきた事をわれわれに教えている。

内外の通貨問題、とりわけ国際通貨制度に関する困難な課題の解決には、今や彼等の実践的叡智に多く負わねばならないのである。この小論の目的は以上の観点から金制動機(ブレーキ)論の積極的意味を探索することにある。

(註) この論文は Schumpeter, Aufsätze zur ökonomischen Theorie, 1952, Germany. に所収されている。頁数もこの論集のものである。後出の〈Rechenpfenige〉も同論集に収められている。

## 二 信用 伸縮 機構

銀行の機能の本質は信用貨幣(銀行貨幣)としての貨幣の造出(production)にあるのであって、貸手と借手との間の単なる媒介にあるのではない。この銀行貨幣(銀行券、預金貨幣等)は、かくして一定量の金量とは何の関係ももたない「非兌換」の不換銀行貨幣である。シュムペーターの銀行信用理論の考察はかんたんに以上のことをわれわれに教えた(拙稿 九州大学『経済学研究』第二十八巻 第六号「シュムペーター信用理論に関する覚書」参照)。

この不換銀行貨幣が生産信用の方法によって流通し、産業資本の流通との交錯がもたらす過程こそ、近代資本主義発展過程の基本的模型を与えるものである。十九世紀後半に急速な近代的産業の発展をとげたドイツ資本主義の姿はこの模型の正当さを立証している、とシュムペーターは考えている。

この過程の出発点は不況克服後、好況開始期の価格状態である。好況は多くの新しい企業の設立、古い企業の近代

化と拡張および全生産設備の完全利用から成り立つ。このために生産手段が必要であり、これを獲得するために銀行信用が必要となる。ところがこのような銀行信用によってあらわれる銀行貨幣数量は従来よりも少しも増加していない生産手段の数量と対立し、したがって銀行信用の出現は、生産手段を獲得するための企業者間の競争を一層激化するにすぎず、かくて生産手段の価格が上昇し、生産手段の所有者の所得が増加し、さらに最後には生産手段の所有者の支出が増大し、消費財価格が上昇する。これは最初はより多くの商品が存在せず、新しい信用需要はたとえ生産的性質のものであるとしても、まだ新商品によって支えられていないためである（信用インフレーション過程—好況から盛況へ）。

一方、創造された信用インフレの機構はそれ自身の中に自己訂正力をもっている。すなわち、景気上昇の刺戟がつきるときに事態は逆転する。これまでに行なわれた企業の設立や拡張の結果は、いまや新しい商品数量の形態で存在している。正常の場合ではこの新しい商品の売上金から供与された銀行信用の一部分が利子とともに銀行に返済される（銀行貨幣の収縮—価格水準の低下—自動的デフレーション過程）。したがっていかなる信用制限がなくとも商品数量がちようど増加する場合にまさに流通貨幣数量は減少する。貨幣の流れと商品の流れとの間の並行関係の一時的な破壊。「このことは実際に生ずることであって、この過程は不況期の価格下落の基礎であり、また不況期と名づけられる現象の基礎でもある」（Schumpeter: *Das Sozialprodukt und die Rechenfennige*, p. 107 邦訳「貨幣分配の理論」第九章 一〇八頁、三輪三訳 以下「Rechenfennige」と略す）。

好況、繁栄、後退、不況、恢復という景気循環の各局面交替の原因を与えようと意図する上記の銀行信用機構を中心とした自己回帰的装置を規定するものは、銀行貨幣の貸付（信用創造）とこれを相殺する産業企業家の確実な返済

であることに注目したい。この返済は、兌換とかその他の法律的規制がなくとも、正常な場合には企業家の順調な拡大せる規模での再生産活動によって保証されている。したがって、実際的にはともかくも、原理的には銀行貨幣の現存、商品流通をこえる過剰発行自体は防止さるべき危険な事象ではなく、むしろ正常な資本主義生産の発展過程のためには不可欠な要素である——恐慌はその他の現実的な要因の附加によりこの価格下落が、急激な形態をとるとき生ずる——総じてこの銀行貨幣の全機構が導く景気循環こそそれを通して資本主義的経済発展が正常に進行する不可欠な貫徹形態である。

右のシュムペーターの主張こそあとでみるように、金兌換を貨幣理論の本質にねざすものとは理解しないで、単に信用機構の安全制動機として把握せしめる一つの主要な根拠をなすものである。つまり兌換規定乃至はその他の法的規制（たとえば一八四四年のピール条令）は「事物の本質には属さない」ものでただ実践上の見地から必要とされてきたものであると考えられている（Bense, p. 177 参照）。兌換ということと、たとえば通貨学派の実践によるピール条令（Bank Charter Act）のとき法的規制と同一並面で語ること自体の中にシュムペーターの金ブレイキ論の本質があるように思われる。

### 三 兌 換 (1)

純粹理論的な装置とはいえ、シュムペーターの銀行信用の機構が、実践的な関連を別とすれば、分析的には兌換を必然的のものとして要求しないという時、そしてその機構が、規則的な景気波動を生起せしめるところの銀行貨幣の貸付と返済という自動装置に规定的に負うていることを観察する時、われわれは「銀行主義原理」(Banking prin-

ciple)の主張者の一人、フラートンの還流の法則(Law of reflux)との比較におもひいたる。

「兌換が完全に行なわれるということは、確かにあらゆる健全かつ有力な通貨制度の本質的条件の一つである。それは国内的信用失墜を防ぐ唯一無二の有効な保護策であり、諸外国との為替相場における甚しい変動混乱にたいして最良の防禦物である。けれども、普通の事態のもとにおいて、銀行券発行高の過剰ということを不可能ならしめるものは、銀行券の金兌換が維持されているということよりも、銀行券の還流が規則正しく行なわれているということに、より多く因由しているのである。……これこそ国内通貨の偉大なる調節原理である」(John Fullarton, On the Regulation of Currencies, (1844) 2ed; London, 1845. 阿野季房訳『通貨調節論』昭和二十三年 八八頁)。

この定理に関するシュムペーターの解釈を中心にして兌換概念の本質を、就中、シュムペーター自身の兌換概念を追求してみよう。シュムペーターは兌換についての銀行学派の考え方について次のようにのべている。

「この学派(銀行学派——引用者)が銀行券の過剰発行は『不可能』であると述べるに当って意味したことのすべては兌換可能性が存在する時は過剰発行が結局きびしく罰せられるということに尽きる、そしてこれは明らかに正しき(Schumpeter, History of Economic Analysis. 東畑精一訳『経済分析の歴史』第四分冊 第三編 第七章、一五二頁以下〈Analysis〉と略す)

更に「還流の法則」については次のようにのべている。この法則は「……正常的には貸付は返済されるものであり、かつこの返済によって△それだけ▽購買力は減殺されるから……自動的に『返済される』銀行信用の場合とそうでない政府紙幣の場合との間には(同書、一五三—一三三頁)、信用インフレ的膨脹を防ぐ上で『甚だ実質的な相異がある』という極めて平凡な事実を端的に」(同書同頁)のべているにすぎない、と。

一体、兌換性と還流の法則とは内的に必然の関係にあるのか。シュムペーターの見解をただす前に、貨幣の「商品説」からする見解を明確にしておこう。かんたんにそして全く不適切であるが、貨幣は商品であり、金である。銀行券はこの金貨幣の支払いを約束した手形（債務証券）以外のなものでもない。したがって、兌換とは、この金貨すなわち本位貨幣の支払いを意味するものであって手形の支払約束の履行に他ならない。このように銀行券は本来手形流通に基礎をおき支払手段としての貨幣の機能に由来したものである。とはいえ銀行券が法貨と同一の資格で一般的流通支払手段として機能しうるのは自らの背後に貨幣金が存在しているからである。発券銀行の兌換準備といわれるものがそれである。しかし銀行券の発行流通高は兌換準備と一致する必要は少しもない（あとでみるように逆の主張こそ通貨主義原理〈currency principle〉と、われるものである）。その理由は貨幣機能の多規定性の把握によってこそ十分に説明しうるものである。貨幣金は価値尺度機能という貨幣の本源的作用を果す他に、この場合に問題になる貨幣蓄蔵の機能をいとなむ。そのため金は信用制度の発達に伴って銀行に集中され、各種の貨幣機能の準備金として役立つと同時に銀行券の兌換性の保証元本としても役立つ。一方、貨幣の支払手段機能から発生して手形流通と共に流通する銀行券の量は、取引決済機構（手形決済）の発展拡充に従って、絶えざる再生産規模の拡大にもかかわらず節約され、その時々々の最低限度の流通必要量に等しくせられる。銀行券といえどもいわゆる流通必要量法則の支配を受けることに変わりはない。還流の法則とは結局は銀行券の流通必要量内に制限されることを指すことに他ならない。したがって現実に発行流通する銀行券は金準備量より多いことも反対に少ないこともありうる。

銀行券が背後に金兌換によって保証されているにもかかわらずその流通量が正貨準備額とは独立しているのは、このように貨幣が商品（金）であるが故にこそである、と。金準備と銀行券発行流通量との不一致は、それ自体では決

して「過剰発行の危機」等のごとき不正常的事態を示すものではない。ここから、この不一致の現象のみを表面的に理解することから、金兌換と銀行券流通とは貨幣理論的にも別個のものであり、いわゆる銀行券の貸付・返済という還流の法則にとっては、金兌換は本質理論的には無関係なもの、唯返済を確実にするための物的乃至法的措置に過ぎないとの觀念が發生し易いことは容易に理解されるところである。フラートンの定理に關するシユムペーターの解積をこのように安易に解する資格は今のところない。シユムペーター自身の兌換規定について一瞥してみよう。

#### 四 兌 換 (2)

兌換あるいは完全価値ある素材による保証を、貨幣理論にとって非本質なもので、ただ信用機構における安全制動機と考ふる思想は、もとより前節でみてきたような金準備と銀行券流通量の不一致という経験的事実の觀察から生じたというよりはむしろ根源的にはシユムペーター自身の貨幣価値論(指図証券説)自体の中に深く横たわっているものである。貨幣価値論を主題としない本稿ではこの問題に深く立ち入ることはできないが、ただシユムペーターによる「貨幣商品」説批判の中のもっとも決定的部分への言及を通して、彼の貨幣価値論の本質に消極的にはあるが触れてみたい。

貨幣価値の本質は金ないしは素材、したがって商品とは無関係である、というシユムペーターがその論証の一つとしてのべた、貨幣「商品説」批判である。

「しかし最後に決定的な論拠は、自由鑄造と自由鑄潰の場合でも、貨幣役割は貨幣金属にそうでないときにもつことになるとは異なる価値を与えるという、いっそう広範な事実のうちにある。もちろんこの場合には貨幣としての

当該金属の一単位の価値は、商品としてのこの金属の一単位の価値と等しくなくてはならない。これは一般に多くの用途をもつ財、たとえばパンとウイスキーの生産に役立つ穀物の各単位が、均衡においてはこれらのあらゆる用途において等しい限界価値をもたねばならないのと同じである。しかしこの限界価値は常にすべての用途を通じて実現される欲望充足の結果である。そこで貨幣としての金属単位の価値が商品としての金属単位の価値からみちびかれるということは、パンに含まれる穀物単位の価値がウイスキーに含まれる穀物単位の価値からみちびかれるということ等しくなく誤りである」(『Rechenpfennige』p. 43—44. 邦訳 一二頁)

マルクスに関するシュムペーターの老大な諸著作の中で、価値実体論に関しては詳しいがマルクス「価値形態論」に言及した箇所は、私の知る限り皆無に近いが、上記の引用文は不正確ながらそれにやや近い唯一の部分である。それはさておき根本的な問題は、商品から貨幣が導かれると言う場合は、商品に対象化されている労働単位をすべての商品に共通な要素の実体としている点、すなわち労働価値説に依拠しているものを、限界概念にそのまま振り替えて導出の困難を語るのは不当であるということであろう。

貨幣としての金属単位の価値が商品としての金属単位の価値から導かれるということは、元来貨幣も一個の商品であり対象化された労働を含んだ商品として他のすべての商品と同質であることを前提としている。したがって前者(貨幣としての金属単位の価値)の価値と後者(商品としての金属単位の価値)の価値とがもともと異なるものと見る事自体に誤謬がある。前者を価格標準としての貨幣の価値に後者を自由相場価格をもつ地金の価値に比することによって、自由鑄造が停止されている金属貨幣が、地金の相場以上になりうる事実が示すように、両者は本質的にその基礎をことにする概念と内容をもつものであると考えられているようである。地金の相場価格が貨幣商品の価格(貨

幣商品金の価値はそれと等置されるすべての商品の無限の系列において表示される。その意味では貨幣は価格をもたない。したがって貨幣の価格とは、価格の尺度標準としての金に与えられた貨幣名であり、鑄造価格である」とが一致しないという事実は決して貨幣商品説の反論となりえない。何故なら価格標準一定の場合でも地金価格は、需給関係の変化と他方ではインフレの事実上の進行によって変動しうるからである。総じて商品から貨幣への道は、素朴なる金屬主義には閉ざされたところの、価値の形態に関する研究によってのみ開かれうるとの理解にはシュムペーターは速いように思われる。

さてシュムペーターの「指図証券」説にもとづく貨幣価値論（購買力説）に踏みとどまる余融のないここでは、シュムペーター自身がそうしているように次の設問によって彼の兌換概念を明らかにする以外に方法がない。すなわち、

「貨幣価値の貨幣素材からの原理的独立という認識に立つとしても、完全価値の素材からなる本位は現実の貨幣信用機構にとって推奨されうるか否か」の問題が残ると（『Rechenphenige』, p. 44 邦訳一三頁）。

シュムペーターは兌換について二つの概念区別を行なう。一つは、いわゆる銀行券の金兌換の請求という意味（本稿第三章兌換(1)の意味）でのそれであり、他は金準備（中央銀行正貨準備）と銀行券発行量との比例関係の維持の観点から管理されるべき兌換義務を指すものである。そして後者の意味での兌換こそ分析対象となりうる重要性をもつもので、これを Einlösung（兌換）なる用語で現わし、それと区別される前者の意味での兌換を Einwechslung（両替・兌換）の用語で呼んでいる。<sup>(註)</sup>

注 〔Bremse〕 p. 180. この二つの独語を区別する適切な邦語が見あたらないので上記のようにした。

すでにみたように、貨幣「商品」説においては銀行券の実体として信用理論の基礎となっている銀行券金兌換の論理は、ここでは逆に、金準備——貨幣數量管理の問題に附随して生じる偶然的副産物として取り扱われるにすぎない。

「兌換義務の制動機作用について語るときわれわれは、銀行および銀行界がその正常な機能を失墜したとき公衆が要求するあの兌換を意味するのではない」(Bremsse > p. 179)。この Einwechslung (両替) の意味での兌換はいわば実践的な意味でも更に外面的なものにすぎないとして次のようにいっている。「素材価値あるいは兌換約束に対する『信賴』は人びとが支払手段と引替えにほぼ従来通りの商品數量を受けとることができるということに対する唯一の本質的な信賴の外面的な形式 (die äußere Form) にすぎない」(Rechenpfennige > p. 46 邦訳二二頁註 12)

ただし貨幣は商品ではなく、又素材一般とは何の關係もない、したがって銀行券の金兌換そのものは貨幣としての貨幣の本質理論にとっては何ものも提供しないとの観点からすれば、あの貨幣恐慌という異常時態における大衆の兌換請求のごときは単なる表面的な現象と映ったであろう。(註)

(註) シュムペーターの右の見解は、一八四七年—五七年恐慌当時の歴史的事実を、一見説明するようである。すなわち当時、銀行券の信用恢復のためには「すでに一八二五年には流通外におかれた手もちの古い一ポンド銀行券のストックを發行することによって」「一八五七年には百万足らずの銀行券が、しかもほんの短期間だけ法定量をこえて發行された」(Das Kapital III. p. 602. 青木文庫訳 七八三—八四頁 エンゲルスの註) だけで解決されたこと、現実には兌換より信賴がより重要であった、と。しかしこうした銀行券不信、貨幣恐慌をもたらしたものが、正に通貨学派の誤れる兌換規制の結果であることはすでに明白である。

## 五金制動機 (ブレーキ)

シムペーターが Einwechslung とは區別された意味での実際の見地から不可欠なものと語る、信用機構における安全制動機としての兌換義務 (Eindlungspflicht) によってどのような具体的内容を指しているのか。

「兌換義務について語るときはがって他のことが意味されるべきである。貨幣価値——それは国内にあっては貨幣単位と法的に結合された金量の市場価値にもとづき、国外では金貨の品位に照応した手形相場の平価状態の下にある——がその低下をおびやかされ、それによって金貨の鑄潰あるいは金貨乃至金棒の輸出が有利になり始める程、それほど購買力創造による信用供与が増大すれば、金本位制度の理念は、これらの諸目的 (金の流出等——引用者) のために要求される銀行の、実際的には中央銀行の金量というものは即刻それに伴って引き渡たされねばならない。この義務履行にたいする顧慮こそわれわれが意味するものであり、制動機能 (Bremswirkung) はこのことにもとづいてゐる」 (Bremsen p. 179)。

シムペーターの金本位制度についての事実認識についていえば、先ず好況期の特徴である信用創造による通貨の拡大は、国内では通貨単位の商品購買力を低下させ (貨幣の価値表示額と金量との不一致)、対外的には為替相場の逆調をまねき金鑄潰、貴金屬の輸出を必然化する、又信用創造による価格騰貴は商品輸入の増大、輸出の阻止をもたらしことによつていっそう金の国外流出に拍車をかける。中央銀行の金準備の危機が生じ、手形相場はもとより国内価格水準は不安定な状態にさらされる。このとき安全制動機装置 (Bremsvorrichtung) はこの中央銀行準備部分を指標として機能をする。「そして銀行機構の第一次大戦前 (金本位制度下——引用者) の体系においては、まさに

中央銀行の準備部分の低下というかたちで示される事態の緊迫化の第一の兆候の基礎上で、中央銀行は実践的には為替相場の保護に、事物の経済的本質からいえば貨幣価値の保護に帰するところのその立場を守護し始めた」(〈Brense〉p. 131)。したがって金制動機的作用は、中央銀行の割引政策の発効という形をとることになる。この割引政策は逆の諸効果を生むことによって、金本位制の自動装置は価格水準安定(貨幣価値の安定)への循環を画く。<sup>(註)</sup>

(註) この中央銀行の割引政策による均衡回復的循環についていえば、先づ銀行貨幣の供給量の増大(イングランド銀行銀行部の貸出額の増大)が一般物価水準の高騰を呼びおこし、物価上昇は貿易収支に赤字となって現れ、国際収支の悪化を引きおこす。公定歩合の引上げはこの場合ロンドン市場におけるイギリスの短期資本(商業手形の割引)の海外流出を防ぎ、更にまた長期資本(外国証券の購入)の流出をも防止することによって国際収支を改善へと導く。同時に金流出からくる信用の収縮は物価水準を低下させ輸出を促進する。逆の場合も同様の推論で成り立つ。

以上のシュムペーターの事実認識は、すぐさまわれわれに通貨学派の主張を思いおこさせる。通貨主義原理は全く不適切ながら要約的にいえば「(一) 銀行券の兌換可能性は、その発行に対する制限がなくては確保されえないこと、また (二) イングランド銀行の銀行券は現実において単なる金証券たりしこと、ないしはかく取り扱われるべきものなること——それは預金や商業手形のごとき信用用具としてではなくて、これらが代表していた鑄貨もしくは地金と全く同じ最終の(準備的)貨幣として取扱われるべきものたること」を主張した(Schumpeter: 〈Analysis〉p. 727—8 邦訳第四分冊、一五二四—五頁)。

つまり通貨主義原理は、銀行券流通の法則を金属貨幣流通の法則と同一視することにその基本的特徴をもっている。したがってそれによれば銀行券の発行流通量が純粹金属流通の場合の流通をこえて増発されれば物価高騰、為替相場の逆調、貴金属の国外流出が生じる。このような状態は避くべきである。そのためには銀行券の発行は純粹金属

貨幣制度において流通する金属貨幣量と正確に一致せしめられるよう管理すべきである。ということにつぎる。

右の見解が、国際的諸支払のための準備金として集積されている蓄蔵貨幣の諸運動と、支払手段機能から発する銀行券の国内的流通とは直接的因果関係をもたない、という認識を欠いていることだけでもすでに根本的な誤謬であることはすでに見てきた。ではこの通貨主義原理からシュムペーターの見解を区別するものは何か。

第一に、信用創造に関する認識のちがいである。シュムペーターの信用創造論はこれを窮局的に言えば「事実上無制限の信用需要に事実上無制限の信用供与」(「Rechenpfennige」邦訳一二頁)が原理上可能的に対応することである。もちろん通貨学派といえども貨幣数量説を原理としているから「流通に必要な範囲」以上の銀行券の発行流通の可能性を容認していた。しかし、経済現象の解明を主として貨幣的要因に依拠していた彼等は、商品量の事後的流通による過剰銀行券流通の相殺、すなわち、銀行への還流という実物的タイムで補完された問題を分析の中に持ち込まなかったため、過剰発行に伴う経済動揺の規制者の役割を金の自由移動に求め、それによる外国為替の自動調節作用をもって答えた。それは腹からの金本位主義者としての通貨学派にしてはむしろ行きつく道筋であった。したがってわれわれは次のように言うことができる。

信用創造が惹きおこす資本主義的景気変動の自律的回帰運動の中に、銀行券の貸付返済の法則を見出すことによつて銀行券の過剰発行(註)そのものを経済の正常な法則的な運行とみなしていること、これこそ貨幣本質論上では通貨学派と共通の地盤に立つにもかかわらずシュムペーターをして特異な存在たらしめる理由である。

(註) ここで言う過剰発行とは、流通に不必要なという意味ではなくて現実の商品流通を越えるという意味である。現実の商品流通を越える場合でも蓄蔵貨幣からの流出であれば問題ないのであるが、シュムペーターの場合は銀行が独自に新しく創造するが

故にあえて過剰（追加）とのべたのである。

銀行券を金貨に引きつけ、金貨自身に解消した金本位主義者としての数量説を原理とする通貨学派とは反対に、金貨を銀行券に引きつけ、銀行券に解消した反金本位主義者としての数量説を原理とするシュムペーターは、銀行券、一般に銀行貨幣は貨幣として完全価値の素材から独立した存在を持つものであるから、銀行貨幣の運動は、商品流通に時間的に追隨する必要はなく、資本主義生産の順当な拡大発展のもとでは銀行の自由裁量の発券はむしろ正常な銀行業務であること、原理的にはいかなる保証もなくとも資本主義経済は規則的景気変動を通して生成発展してゆくことを強調しなければならなかった。そしてむしろ金兌換のごとき貨幣価値の保証方法は、貨幣価値を金生産のあらゆる偶然にさらすばかりか、それによって本来なら果たさるべき生産拡張のための信用創造が厳しく制限されるとの意図でそれ自身理想的なものではない、と考えていた。

しかし、幾度も強調したようにこの信用機構の自動調節運動（景気循環——この場合は破壊的恐慌はふくまれていない）は原理的にそうなるというにすぎないのであって、現実には、様々の附加的要因が働いてこの装置が円滑に機能する保証は全くは与えられていない。景気循環の不況局面はそのため深刻な大恐慌をまねくかもしれない。ここにこそ制動機（ブレーキ）としての金兌換（Eini sung）がその固有の働きを見出すのである。シュムペーター以下の言葉はかくして理解され易いものとなる。

「貨幣の完全価値への結合はもちろん欠陥をもつもので、これによって所得単位はこの素材の価値の変動にさらされることになるが、しかしなお非常に実践的意義がありうる」こと「もし貨幣が完全価値の素材からなっている場合には、その所有者は、もとより完全無欠に機能するものではないが、このような保証、いわば商品への兌換に対する

一種の動産抵当をもつことになる。そして安全性が当事者を越える権力、場合によっては超国家的でさえなくてはならない権力によって、あるいは妥当な道德水準によって疑う余地なく与えられていない限り、この動産抵当のみが高価であることによって、そうでない場合に国民経済的な財貯蔵池に対する指図証券をたえずおびやかす危険、すなわち指図証券の任意の増加を防ぐのである」 「それ故にこれはいまだ到達されていない文化段階に高まるまでは貨幣によってなされる自動的な清算過程の円滑な機能のためにおそらく不可欠な前提条件なのである。この点に——しかもこの点にのみ——固有価値をもたない流通貨幣の金屬による『兌換準備』の意義も又有する」 (『Rechenpfennige』 pp. 44—45 邦訳 一四頁)。

われわれが最初に提出したフラートンの定理(兌換と還流の法則との関係把握が問題であった)に対するシュムペーターの解釈は、したがって以上のすべてからかんたんに次のように理解してもよいであろう。

非兌換の銀行券が生産信用の方法によって流通する場合には、すなわち革新への融資としての信用創造が行なわれる場合には、原理的には物価水準に独立の影響を与えることが可能であり信用インフレを通して資本主義経済に特有な景気循環の律動を導く。他方、フラートン自身の主張が含むように、銀行券が兌換保証されている場合には、その場合にのみ、金本位制が自動的に機構に入れ込んだこの安全制動機によって銀行の信用創造はきびしく制限される。典型的にはあの一流の手形割引の事態で示されるように銀行の役割は商品の過程に受動的に適応する伝導体としてしか機能を果さず、銀行券の増加は常に生産拡張が価格に及ぼす影響を相殺するにすぎないとのいわゆる還流の法則は支持されうると。「しかしその場合には銀行貨幣の購買力は銀行貨幣の本質とは無関係なブレーキによってその低落から守られる」 (『Rechenpfennige』 p. 114 邦訳 一六頁) 限りにおいてである。

しかしこれらの金ブレイキ——もつとも中心的には中央銀行準備金に作用する、それは割引政策という形態で手形相場と貨幣価値の安定化に作用し最後に価格水準の安定化を目的とする——は結局、経済組織と文化の相対的に未発達な段階に照応せるもので、いずれは取りはずされるべき、ないしはその機能をより有効に果すようその管理へと改革を志向さるべきであらうと貨幣管理への展望を与えるのである。<sup>(註)</sup>

(註) 金ブレイキ論は以上の限りではシムムペーターの金本位制に対する基礎的認識に触れたにすぎない。したがってこの序論的部分にすぎない本稿につづいている (1) 貨幣管理 (信用の統制) (2) 現代通貨機構の本質 (3) 国際通貨機構の基礎  
へむすびⅤの中で 金ブレイキ論はより具体的な形態で検討されなければならない。